文　章・文　体

高崎　みどり

はじめに

今回，この分野の研究展望を次の三つの角度から行いたい。

1．多視点的接近の必要性
2．内部構造の分析
3．受け手の立場からの研究

これらは，『国語学の五十年』（武蔵野書院，1995.5）の「文章・文体（理論）」において南不二男氏によって検討するに価する問題として指摘され，本展望平成6・7年度分担当者の半沢幹一氏も「今後のこと」として取り上げられた諸点である。文章・文体研究の方向性を示したものとして，いわば定点観測的にこれらの三点をすえ，展望を試みたい。なお，それらについてどのような内容が相当するのか，また，どの論文論考がそこに入るべきなのか，といったことは，すべて今期展望執筆者の責任に属しており，恣意的な解釈ともいえることを最初にお断りしておく。

※2度以上にわたって言及する論考に対しては，初出時に①，②…のナンバーが付してある。

1．多視点的接近の必要性―俯瞰図的に

はじめに，広い意味での文章・談話研究について，俯瞰図的な視点から編まれた二種の雑誌特集と，講座の一巻で，どのように多視点的接近がなされたかを探ってみる。

『言語』（28-1,1999.1）は特集「ディスコース研究の射程」で「具体的言語実践をどう捉えるか」（副題）という角度から編集されている。ディスコースという対象・材料を共通のものとして，談話分析・社会学・言語人類学・認知科学等の研究者が，今どういう視点で接近しているのかがわかる。それらの根底にあるのは，特集巻頭の茂呂雄二「開かれたディスコース概念のために」によると，ディスコースの研究が社会から切り離せないものであり，経験主義から離脱することを意味していること，何よりもディスコースが日々の実践であり種々雑多性を特徴とするものであること等の認識である。そうした認識が，一見，分野も方法もバラバラな個々の論考（山崎敬一・鈴木栄幸・小山慎哉・葛岡英明「会話分析とテクノロジー分析――エスノメソドロジーとディスコースの研究――」，松木啓子「語り（ナラティブ）のディスコース現象――社会行為としての言語使用再考――」，金澤貴之「作られる『社

会問題』――構造主義アプローチからのディスコース研究――」，など）を貫く原理であろう。

次に，①田窪行則・西山佑司・三藤博・亀山恵・片桐恭弘『岩波講座 言語の科学７ 談話と文脈』（岩波書店，1999.3）では，冒頭の田窪行則「学習の手引」に「これまで，文を超える単位の研究は，規則化が困難であるため，言語科学研究の中心をしめることはなかったといってよいが，計算機科学や論理意味論の発展により，これから明示的な規則を取り出すことが可能になってきた。言語現象は談話の形で現れるわけであり，我々の言語現象の観察は基本的に談話から始まる。」とあり，多視点的接近とそれが言語そのものの研究にもたらす利にふれている。それをふまえて「1．語用論の基礎概念」「2．談話の意味表示」「3．談話分析：整合性と結束性」「4．対話の計算論的モデル」の４章で構成されている。

②『日本語学』（18-11,1999.10）の特集「これからの談話研究」の宇佐美まゆみ「談話の定量的分析――言語社会心理学的アプローチ――」では会話の分析に対する５つのアプローチ（エスノメソドロジー・社会言語学・言語学・発達心理学ならびに社会心理学・認知心理学）が解説されている。特集中には他に茂呂雄二「言語的相互行為のステータス――談話の認知科学的研究――」，小磯花絵「談話研究を支える会話コーパス――その作成と利用の仕方――」などがある。

2．多視点的接近――「文章・文体」に関して

このように，文章・談話に対する多視点的接近は，今期だけ見ても多くの分野からなされつつある。国語学・日本語学においても，従来から文章研究，中でも文体・表現研究は多彩な面を持っていたが，多視点的接近の刺激を受けて一層の広がりを見せている。一方，自然談話のコーパス作成や活字テクストのデータ化，分析視点の多様化に伴う方法論において，国語学・日本語学の寄与も大きく，また今後もますますそれが必要とされよう。さて，それでは，従来の「文章・文体」で扱われるべき論文論考を，“談話・文章に対する多視点的接近”という眼で見てみよう。異論もあろうかと思うが，今回，本展望の分野名「文章・文体」の「文章」には「文章・談話」という意味を持たせた。また，「文体」には「文体・表現」という意味を持たせた上で，文章・談話に対する多視点の一つとして扱うこととした。

なお，後の「内部構造の分析」「受け手の立場からの研究」で扱えるものはそちらの方で言及する。

まず，**談話機能**から言葉の意味やふるまいを見ていく視点がある。川木冴子「『そういえば』による文の連接」（『東海大学紀要・留学生教育センター』19,1999.2）は，「そういえば」に，納得・同意表示・思い出し表示等々の機能を見出し，受け手への注釈の意図をみる。他に横尾佐世「コミュニケーションの中での話し手の期待――『ふうん』を中心に――」（『表現研究』69,1999.3），沖裕子「接続詞『あるいは』と『または』の意味について――談話展開機能の獲得にふれて――」（信州大学『人文科学論集』32,1998.3），石黒圭「逆接の基本的性

格と表現価値」(『国語学』198,1999.9) など。こうした研究が種々の語について広く行われていけば，普通の辞書では見出しにくい“談話機能としての意味”が多くの語句について登録され蓄積されていくのではなかろうか。

文章・談話の産出およびその方略については，高塚成信「コミュニケーション方略としての『言い換え』――その指導内容と方法に関する基礎的研究――」(岡山大学教育学部『研究集録』110,1999.3)，黒岩督・菊地肇「説明文の産出に及ぼす課題解釈の明確化の効果」(『兵庫教育大学研究紀要』19,1999.2)，宮崎里司「接触場面でのコミュニケーション調整とそのディスコースパターン：自己マーク自己調整を中心として」(『早稲田日本語研究』7,1999.3) など。

心理学的アプローチに，石田潤「文章表現論に関する認知心理学的アプローチの構想」(神戸商科大学『人文論集』33-1,1998.1)，村田夏子「文章読解と現実認識の関連」(『文京女子短期大学英語英文科紀要』31,1998.12) など。

次に，**伝達・引用**という視点。中島泰貴「物語引用と回想表現――『うたたね』における作り物語引用の位相――」(『名古屋大学国語国文学』82,1998.7) は，引用という形式の果たす機能から，それが傾倒・陶酔の現れでなく，執筆現在の自己を照らし出すものとして働いていることを指摘。山口康子「夢解きの要らない夢――『古今著聞集』の夢の引用――」(『長崎大学教育学部紀要』58,1999.3) は，古今著聞集の夢の引用について今昔物語や宇治拾遺物語のそれと比較する。他に永井麻生子「伝聞の文末表現の使用に関する一考察――報道文における『という。』の使用/不使用について――」(『神戸市外国語大学研究科論集』1,1998.5) など。

物語論・物語分析の方法で文学テクストを見るのは，笹川洋子「ジェンダーの視点からみた『花ごもり』『やみ夜』『たけくらべ』の言語行為について――見つめる女たち・うつ向く男たち――」(『親和国文』33,1998.12)，野網摩利子「『たけくらべ』における内面の発生地点，その形成法」(『文体論研究』45,1999.3)。

続いて**文体・表現**という視点であるが，もともと「文体論」という研究分野は，文章・談話についてその全体を見わたすという姿勢を持っていた。一方，文章・談話研究は，理論的に追究される場合も少なくないが，その場合も多くの具体的談話・文章の分析をふまえた上で言われることが多い。国語教育や日本語教育への応用をはかる実践的な文章・談話研究が，材料・データとして使用するのも，今のところは，各々場面（送り手・受け手・目的…を含む）を持った文章・談話であって，文法研究のように作例で考える訳ではないであろう。そして「文体論」は，送り手によって，あるいは受け手ないし目的によって（つまり場面によって）言語使用の様相が異なり，そこに“個性”を見出すという，人間的ファクターを注視する姿勢を基本的に有している。一個の文章・談話のみならず，ある人（たとえば作家）の，多くの文章・談話（たとえば全作品）を壮大な織物のように通して見る，という見方さえとることがある。このように「文体論」の，文章・談話に対する姿勢というものは，文章・談話研究とは別個のものではなく，その一角に好位置を占める可能性がある，と私見では考えている。

このように考えると，文章・談話を対象として文体・表現から見る視点を，文章・談話研究の多視点の一つとして位置づけて見てもよいのではなかろうか。

さて，今期の文体・表現についての研究を見ていくと，まず，文体・表現を論じる対象となる文章・談話の**種類と分析角度**が多岐にわたってきているのが特徴である。文学作品では③増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹編『源氏物語研究集成 3　源氏物語の表現と文体 上』(風間書房，1998.11)がある。また，④橘豊『日本語表現論考』(おうふう，1999.11)は，文体論表現論上の特性を取り出すのに必要な音韻や語彙，語法についての考察と，それらを応用した具体的な作品分析から成る。⑤山口仲美『平安朝の言葉と文体』(風間書房，1998.6) では，歌文融合の「歌」と「文」の近づけ方の差異を，源氏物語と和泉式部日記に見る分析など，諸作品についての多くの角度からの分析がなされている。また，古歌も含む「歌」そのものも対象となり，「シンポジウム〈はやりうた〉の表現」(『表現研究』68,1998.10) での半沢幹一「シンポジウム報告と研究展望」，西村真一「〈はやりうた〉の表現――『万葉集』作者未詳歌を通して――」があり，石井正彦「歌謡曲の聞き手はどんな単語を好むか」(『表現研究』69,1999.3) もある。他に神谷かをる「近代詩・短歌・唱歌・流行歌の複合動詞による韻文的語彙――古典語（古今集）との比較――」(『光華日本文学』6,1998.8)，村上治美「雨の歌の系譜――1920～50 年代の大衆歌謡曲と古歌の比較を中心として――」(『東海大学紀要・留学生センター』19,1999.2)，伊藤雅光「ユーミンの言語学」(『日本語学』連載中。今期分は 17-1,3―10,12―14 および 18-1―4,7,9,11,14,1998.1―12,1999.1―4,6,8,10,12)など。そして落語も対象となる。野村雅昭「続・落語のレトリック」(『日本語学』連載。今期分は 17-1,3―7,1998-1―6)は，トリチガエの分析を最後にひとまず完となり，今後は落語をひとまとまりの談話と捉える分析により，噺の構成に関する手法を見ていくことが予告されている。また，『表現学大系 15　現代小説の表現 二』(教育出版センター，1999.3)の，林巨樹「現代小説の表現――田宮虎彦――」，千葉貢「安岡章太郎の文体考――『海辺の光景』を視座として――」，半沢幹一「庄野潤三――「静物」の光と影――」，『表現学大系 16 現代小説の表現 三』(教育出版センター，1999.11) の上谷順三郎「井上靖――その自伝的小説の表現――」，佐藤嗣男「北杜夫――初期掌編四種『KRANKHEIT（病気）』の世界――」，高崎みどり「小川国夫」，橘豊「渡辺淳一」がある。

今後も，対象となる文章・談話は多様なものが取り上げられていくと予想される。また，研究角度も上記で少しふれたものの他にいくつかみてみると，まず，**「語り」**についてだが，⑥『文学』(9-2,1998.4) では「『語り』の言説」が特集されており，イルメラ・日地谷＝キルシュネライト・亀井秀雄・鈴木登美・藤井貞和・宗像和重による座談会「『私がたり』の言説について」，鈴木登美「近代日本を語る私小説言説」，三谷邦明「物語の語りと近代小説――『藪の中』を読むあるいは一人称語りの饗宴――」から小森陽一「人称性のゆらぎ――太宰治と語り――」まで論考が並ぶ。それらの中で，欧米の言語学の枠あるいは学校文法や近代の制度の中でゆきわたっている人称や時制の概念で，日本語の古典文学(ひいては

“私小説”）を説明することに対する問題提起もなされている。

次に，レトリックのうちの**比喩**が引き続き注目されている。森雄一「提喩についての一考察」（『明海日本語』4,1998.3），多門靖容「例示・参照域・修辞意識に関する覚え書」（『表現研究』70,1999.10）など。『上代文学』（82,1999.4）の「特集・比喩の古代」は，三浦佑之「比喩の古代――神話の表現から――」，近藤信義「序歌構造と比喩――音の領域から――」等の論考を含み，「喩」を修辞でなく神話的世界そのものを表した具体的な描写であるとする見方，使われる音をも「喩」として見ていく必要がある，といった見方が示される。河添房江『源氏物語表現史　喩と王権の位相』（翰林書房，1998.3）の中でも“喩の表現史”として花・暁と夕べなどが取り上げられている。また比喩ではないが，言語生活の場でのレトリックともいえる皮肉や嫌味を分析した河上誓作「アイロニーの言語学」（『待兼山論叢　文学篇』32,1998.12）もある。

また，文体研究の上で，**“類型の文体”**とされる和文体，漢文体，言文一致体等は，文体史からのみならず，文章のジャンルや機能，棲み分け，という観点からも見ることができよう。田中牧郎「今昔物語集の情意述語文と文体」（『国語学』194,1998.9），勝山幸人「『和文体』形成の構想について」（静岡大学人文学部『人文論集』49-1,1998.7），風間誠史「表現の国学――賀茂真淵から橘守部まで――」（『日本文学』48-2,1999.2）等があったが，今期，特に明治期に種々の文体が内容目的に応じて機能していく様相を，文学作品に，あるいは国語教育に見るものが目についたので紹介してみたい。森岡健二『欧文訓読の研究――欧文脈の形成――』（明治書院，1999.2）は，「訓読」された「欧文直訳体」に緻密精確の内容を言うのに適するという機能を見，明治20年頃から日本人の文章に欧文直訳的語法・措辞が現れ始め，そして翻訳の文章にも直訳的語法・措辞がよく用いられるようになって，欧文脈が定着したありさまを多くの語法・措辞の使用例から通覧している。また，バーネット作『小公子』の若松賤子訳を中心に取り上げた「特集 日本語の一世紀」（『国文学　解釈と鑑賞』64-7,1999.7）に，宮島達夫「百年まえの口語文――『小公子』の文章――」，中村哲也「若松賤子訳『小公子』の〈語り〉と文体」等がある。関連のものとして他に，鈴木直枝「明治後期における『英語青年』の翻訳――canの訳し方を通して――」（東北大学『国語学研究』37,1998.3），中山昭彦「翻訳する/される〈言文一致〉――多言語性と単一言語性の間――」（『日本文学』47-4,1998.4）等がある。また，国語教育史の観点でもあるが，教育関係で，北澤尚「明治時代の女学生の書簡の文体」（『東京学芸大学紀要第2部門』50,1999.2），母利司朗「明治前期作文教育と文部省編『書牘日用文』」（岐阜大学『国語国文学』26,1999.3），有沢俊太郎『明治前中期における日本的レトリックの展開過程に関する研究』（風間書房，1998.1）などがある。特に最後の有沢氏の論考は，十八・九世紀英国レトリックが明治前中期の人々によって迎えられ，日本的レトリックとして修正されつつ育てられた過程を分析する。そして“翻訳レトリック”では欠落してしまった部分でも，実践（演説や作文など）の場に入れることで働くフィードバック機能により，それは確実に回復すると述べる。

「多視点的接近」の項はこれで終えるが，続く「内部構造の分析」と「受け手の立場からの研究」で挙げる論考の中にも，多視点的接近の中に位置付けられるものが少なからずある。

3. 内部構造の分析

内部構造といっても，文章・談話の場合は，文の内部の文法構造のように厳密なものは設定しにくく，①の亀山恵「3.談話分析：整合性と結束性」も指摘するごとく「文法(ここでは生成文法を指す)が文法的な文と非文をはっきり区別する違反不可能規則からなるのに対し，談話法は，談話の『自然さ』『わかりやすさ』を統御する違反可能な優先規則からなる」という線に沿った構造の捉え方となる。文章・談話の目的や機能も関与してくるので，関係する論考論文も多岐にわたり，そうした広がりの中から種々の「優先規則」が提出されてくる。

まず，拠って立つ観点こそ各々違え，ある角度から**文章・談話の構造**を捉えようとしたものを見よう。内田安伊子「テキスト構造と一貫性に関する一考察」(お茶の水女子大学『人文科学紀要』52,1999.3) は，流れ (隣り合う節や文の要素間の) と，全体構成 (より高次レベルの要素間の) を，ともに見ることが可能な，一貫性の観点からの考察。高梨克也「一貫性の多様な次元――日常会話と思考の『自然な流れ』の解明に向けて――」(『DYNAMIS』3,1999.3) は，思考の流れと会話との関連を，会話分析や語用論等の理論を検討しつつ，探っている。特に談話分析における一貫性について，思考の認知科学という点から，今までの談話理論を整理し，文献解題も付して，今後の研究の「企画書」という意味合いを持たせている。他に佐久間まゆみ「現代日本語の文章構造類型」(『日本女子大学文学部紀要』48,1999.3)，②の尾上圭介「落語の〈下げ〉の談話論的構造」，野田尚史「『ていねいさ』からみた文章・談話の構造」(『国語学』194,1998.9)，木戸光子「同じ話題の新聞記事の文章構造の比較――日米台青少年意識調査アンケート結果の報道記事について――」(『筑波大学留学生センター日本語教育論集』13,1998.2)，林明子「会話展開のためのストラテジー――『断わり』と『詫び』の出現状況と会話展開上の機能――」(『東京学芸大学紀要第2部門』50,1999.2)，金庭久美子・川村よし子「TV ニュース構成の特徴分析とそれを支える表現」(『日本語教育』101,1999.7)，根津真知子・村野良子「留守番電話の談話構造の分析」(『ICU 日本語教育センター紀要』8,1999.3)。古典作品でも，⑤の山口仲美「第三部第二章 説話文学の文章構成」，西田隆政「源氏物語における対偶構成の巻々(3)――明石の巻を中心に――」(『大分大学教育学部研究紀要』20-2,1998.10)，今村みゑ子「『今物語』の編纂と表現」(『国語と国文学』76-9,1999.9) 等がある。また，構造把握の教育的応用をはかったものに，林明子・加藤清方・谷部弘子「コンピュータによる文章構造把握支援システムの開発と評価」(『東京学芸大学紀要第2部門』50,1999.2)，立川和美「段落構造の把握と国語教育への応用――「天声人語」を題材として――」(『文体論研究』44,1998.3) など。

なお，**単位や図示法**なども，構造を考える際の課題であるが，①の亀山恵「3.談話分析：整合性と結束性」では，“発話文”や“談話節”といった単位，また“談話木構造”といった図式化が紹介・提案されている。⑦林四郎『文章論の基礎問題』(三省堂 1998,10)では，読み手の理解の流れに即して“文塊”が形成される現象を指摘している。加えて，文章・談話に文が組み入れられる時に執る「講話姿勢」の考え方も示され，流れ（文脈）の中で各文を捉えた上での文章・談話の全体像が，図示もまじえて示される。村田年「文章と文型――ジャンルの異なる文章における文型の使用頻度調査――」(慶応義塾大学『日本語と日本語教育』27,1999.3)も，文の文型を文章・談話の構造の中で見ている。また，中村吉秀「表現における構造」(『表現研究』70,1999.10)は，一部分が全体の相似形となっている自己相似性（フラクタクル図形）の概念は，文章表現の構造にもあてはまる，とし，文が段落に，段落が文章にと相似し，共通した機能の因子が表現に宿る，とする。また，必ずしも全体構造をきれいに説明するということではないが，語句が連鎖していくことにより，あるいは語句が論理展開や物語展開に役割を果たすことにより，文章・談話の中の低次レベルでの構造に関与する場合もある。清水佳子「主題の連鎖と接続詞との関連」(大阪大学『日本学報』18,1999.3)，甲田直美「接続詞と物語叙法」(『表現研究』67,1998.3)など。石井正彦「文章における『臨時一語化』と『脱臨時一語化』――脱臨時一語化の形式を中心に――」(東京都立大学『日本語研究』19,1999.4)は，語句の語彙的側面に注目して，単語連続が臨時に合成語となることと，その逆との二つの現象を，文章のなかでのダイナミクスとして捉えている。

一方，**語句が，文章・談話全体の文体・表現にどう関わっているか**，という観点からの研究も先に挙げた③④⑤をはじめとして多く出ている。中村明「井伏小沼八百番手合――文体対比のための覚書――」(『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』11,1998.6)では，同一題材の井伏鱒二と小沼丹の作品について，文長や段落の他，主語，連体・連用修飾，呼称，固有名詞等の使われ方を比較し，その文体の差異のよってきたるところを明示している。また，渋谷勝己「漱石のスタイルシフト」(『待兼山論叢 日本学篇』32,1998.12)は，五種の可能形式のどれを選択するかに，個人の作品毎のスタイルの切り替えをみている。

最後に文章・談話における**構造と表現**の関係についてであるが，『表現研究』(70,1999.10)の特集「表現における構造」では，前述中村吉秀論文の他，物語の構造を表層レベルの構造とは別の深層レベルで見た時，全く異質の作品間にもつながりを見出せる，とした平野芳信「彼らの死ぬ理由――表現における構造――」，“構造”について表現機構の側から理論的に整理し問題提起を試みた早川勝広「表現における構造」などを載せる。一方，“視点”あるいはパースペクティブの問題も表現と構造に関わってくるテーマである。具体的な作品を材料として考察したものに森一郎「源氏物語の語りの表現構造――敬語法を視座として――」(『国語と国文学』75-3,1998.3)，中嶋隆「西鶴『会話文体』の遠近法」(『日本文学』48-10,1999.10)があり，その他にも永田高志「日本語の心話文」(『シュンポシオン』

4,1999.3)，藤原将修「遠近法と叙述の関係について――とらえかえされる遠近法――」(『国語表現研究』11,1998.3) など。

4. 受け手の立場からの研究

読みのプロセスに焦点をあてたものをまず見てみる。『言語』(27-2,1998.2)の「特集"読む"」は，読み手の行為に種々の観点からアプローチしたもの。その中で三宅なほみ・野田耕平「読みのプロセスを『見る』」は"読み"に隠されている自然な構成プロセスを顕在化させる試みをしている。中野潔「要約ソフトが突きつける『読む』の意味」や増井透「速読の心理学的考察」からも"読む"という行為のメカニズムが徐々に明らかにされてくる。合庭惇「読む行為の変質」からは，ハイパーテキストの出現によって，我々が信じていたテクストの連続性は，言語の連続性の他に，印刷された製本の連続性を土台に成立させられていることを思い知らされ，当然それは，思考の構造とは当面無関係であるということを突きつけられる。その指摘は⑥三谷邦明「物語の語りと近代小説――『藪の中』を読むあるいは一人称語りの饗宴――」で，"言説の上に虚構を刻みこむことは不可能"であり，「藪の中」の「多襄丸の白状」を虚構として読むのは，枠（フレーム）があるからで，芥川龍之介という著者名，文庫などの判型，表紙，題名，帯等，小説であることを指示する外的な特徴によるのだ，という指摘にも通ずる。また，同じ⑥の座談会，「『私がたり』の言説について」で鈴木登美氏が"私小説の同定は読みのパラダイムの問題"と発言しているのも同様で，"読む"という行為，そして読み手の存在が，テクストの成立に必要不可欠であることを改めて思い知らされ，この方面の研究の重要性を認識させられる。

もう少し**受け手**について注目する論考を見てみよう。①の亀山恵「3.談話分析：整合性と結束性」の前章で引いた記述の中で，談話法の統御する談話の「自然さ」「わかりやすさ」のうちの少なくとも「わかりやすさ」は受け手目あてのものであろう。受け手の存在が談話・文章に働くルールの重要な要因となり，送り手の送る行為，テクストの成立をも支配するのである。西原鈴子「日・英語新聞社説における書き手・読み手関係――対照修辞論の一考察――」(国立国語研究所『日本語教育論集』14,1998.1) では，「書き手の書きぶりは，読み手の期待によって支えられている」ために，文章の内部の構造にも，書き手のとる類型だけでなく読み手が読解時にとる観点が関わってくることが示唆される。坂田充範「読者論的文章分類のための覚え書き――理論ベースの概念理論を援用して――」(『国語年誌』17,1999.2)は，読み手の持つテクストの説明原理のクラスターを，文章の分類原理とすることを提案している。上述の「わかりやすさ」という表現の面に注目した斎藤由美子「『沙石集』の直喩表現」(『梅花短期大学研究紀要』46,1998.3) は，説経をよりわかりやすく具体的に説くための直喩表現という捉え方をする。

その他受け手の関与から文章・談話について種々の観点を設けて分析する論考は多く，

長田久男『文章を読む行為の研究』（溪水社，1998.10）は，「文章を読む言語行為とは，文章の表現に即しながら自問自答を繰り返す言語行為である」という仮説を検証しつつ展開される。他に，難波博孝「説明文テクストの顕在的構造と潜在的構造――母語教育のための分析――」（『表現研究』70，1999.10），北尾友美「文学作品の読解過程に関する基礎的研究――テクストを形成する能動的読み――」（『国語表現研究』12,1999.3）など。また坂田達紀「小林秀雄『無常といふ事』の表現特性――文章レトリックの観点から――」（『国語表現研究』11,1998.3），中川正美「八代集『うし』表現の基底――掛詞の喩――」（東京大学『国語と国文学』75-12,1998.12），平井修成「詩歌の所謂〈修辞的技巧〉の心的効果について」（『常葉国文』23,1998.7）はいずれも読者の受容・享受とテクストの表現特性を関連づけている。

次に受け手の**理解及び理解過程**を追究する論考も多い。まず要約という表現行為には原文章・談話の理解のあとが明確に刻まれるが，佐久間まゆみ「段落区分と要約文の表現方法」（『国文目白』37,1998.2）は，要約文の評価を行い，評価の高い要約文は原文の中心的内容と基本構造を反映していること等の結果を示す。伊藤光「縮小率の異なる要約文における段の再構成」（『表現研究』68,1998.10）は読み手の要約作業が原文の構造を反映する様相をあとづける。

谷口篤『文章の理解と記憶を促進する具体化情報』（風間書房，1999.2）は，ある文章について，具体化機能をもつ付加情報が，マクロ構造の形成を促進し，文章の理解・記憶に役割を果たすことを種々の角度から示そうとする。筆者の主旨からははずれるかもしれないが，“文章”というものの全体性・統一性を云々する時，たとえば広告におけるコピーと絵・写真類，絵本における文章と挿し絵，また一般的な書物においても前書き，後書き，傍注等と本文といった関係をどう説明するのか，というような問題にも示唆を与えるのではないだろうか。岩槻恵子「説明文理解における図表形式の要約の影響――発話プロトコル法による理解過程の検討――」（『読書科学』42-4,1998.12）には，「空間化」が，時間的線条的な文章の理解を促進するという指摘がある。他に佐藤公代「文章の読解・記憶に及ぼす漫画の役割」（『愛媛大学教育学部紀要』45-1,1998.9），同じく佐藤公代「文章の読解・記憶に及ぼす構えの役割」（『愛媛大学教育学部紀要』45-2,1999.2）等があった。あと，論考全体は「多視点的接近」の方に入れるべきものかもしれないが，邑本俊亮『文章理解についての認知心理学的研究――記憶と要約に関する実験と理解過程のモデル化――』（風間書房，1998.10）の中で，心の中の“要旨”と，作業の結果としての要約文とは異なるもので，その原因は，要約文章自体を文章として産出するための制約にある，等々実験結果に即したいくつかの考察が提出されている。受け手の理解及び理解過程に注目して，国語教育・日本語教育への応用をはかる場合も多い。梅澤実「小学４年生は説明文をどう読むか――説明文読解過程における既有知識と説明文スキーマの働き――」（『読書科学』42-3,1998.10），堀井謙一・松崎史周・河崎直茂・児平美和「接続詞の指導における留意点について――言語指導と論理把握指導の違いを区別する――」（『信州大学教育学部紀要』96,1999.3）等。田代ひとみ「読み手から

みた説明文のわかりやすさの分析――日本語学習者の文章を中心に――」(『東京大学留学生センター紀要』9,1999.3)では，実際の読解では構造よりも“流れ”(内容の論理的展開の順調さ)が“読みやすい”感じを左右し，読み終わって内容を再生的に把握する時に構造が問題となる，ということが示唆される。今後も構造とともにこの“流れ”というものを，言語形式の上からも明らかにしていく必要があるだろう。教育的応用の研究には教えられるところが多いが，岩永正史「読み手の認知スタイルに合わない文章」(『日本語学』18-14,1999.12)には，認知スタイルに当てはまらない文章は違和感を感じさせ理解されにくい，という指摘とともに，「説明文教材化の歴史は，説明文に対する読み手の認知スタイルを発見してきた歴史とみることもできる」との指摘があった。

携帯電話やEメール，電子テキスト等の新しいツールの出現と関わらせた研究も萌芽が見られたが，次期はもっと発展していると思われるので，すべて次回展望にゆずることとしたい。西崎亨「活字と肉筆――『坊ちゃん』の『原稿』と『初出本』と『初版本』と――」(『武庫川女子大学言語文化研究所年報』10,1999.7)で，送り手と受け手の間に「活字」が介在することで，原テクストの意味が変えられてしまった，という主旨の分析などを読むと，現代のコミュニケーションツールの大変化はこの受け手の立場からの研究にも新たなテーマを提供することが予想されるのである。

最後に，「受け手の立場からの研究」の項を閉じるにあたり，⑦の林四郎氏の指摘をとりあげたい。「元来，物語は，語られるもの，聞きつつ理解していくものであって，文字づらや紙面構成を目が見て理解するものではない」として，江戸時代の注釈のカギカッコは，この部分は誰が提供する情報なのかという「情報の領域」を示したものだが，現代の我々はそれを話者の生の声を保証する「声の領域」を示すものとして見てしまう，と指摘する。聞き手，読み手のテクスト成立への関与の重大性を改めて認識させられるとともに，種々の文章・談話を対象として研究する際の研究方法への問題提起としても受け止めたい。

おわりに

ごく大胆にまとめると，文章・談話を対象とする研究は，多くの分野からの接近がなされており，これは社会学，これは日本語学などという区別があまり意味のないものに感じられるほど多様で刺激的である。国語学・日本語学という一線をどこかで引かねばならぬとは思うが，今のところこのエネルギーを大切に育て見守ることの方が魅力的である。研究の角度としての「受け手の立場からの研究」は広がりと深まりを持ちつつあるが，「内部構造」の方はまだまだ模索が続いているように思われる。

以上で未熟で不備な展望を終えるが，本来厳密に定義づけてから使用すべきターム(「文章」「談話」「ディスコース」「テクスト」「文体」「表現」など)を紙幅の都合もあり，一切注釈せずに使用した。また，当然「文章・文体」において言及すべき論考で，今回のよ

うな柱の立て方では取り上げられなかったものも多い。取り上げた論考でも見当はずれの読み方をしたものが少なくないと思う。御寛恕を願い，又，御批正をお願いして稿を終えたい。

資料収集にあたって，国立国語研究所の尾崎喜光氏・塚田実知代氏・杉本明子氏及び同図書館の方々に大変お世話になりましたことを感謝し，お礼を申し上げたいと思います。

——明治大学教授——